IS　貧乏人と織斑一夏

黒龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　貧乏人と織斑一夏

【Ｎコード】
Ｎ２７８３Ｚ

【作者名】
黒龍

【あらすじ】
作者文才なし
読みにくい
短いと
三拍子そろって
とてもひどいものになっていますが
時間があったら見ていってください

評価、感想、指摘、改善点、不満点、
何でもいいので教えてください

一億円の借金を背負っていた女オリ主が
ＩＳ学園に入学する話です
後々恋愛要素が含まれていきます。

第一話（前書き）

はじめまして黒龍です

第一話

家はとても裕福とはいえない暮らしをしている
5歳の私でもわかるぐらいおかねがなかった
そのせいで親はいつもケンカしていた
最初は罵ってそして殴る、蹴る・・・ｅｔｃ
私は被害を受けないようにいつもどおり家から逃げるように
外に出た。

数時間後家に帰ろうと玄関の前まできたら違和感を感じたが
玄関前で待っているわけにもいかないので気づかれないように玄関
を開けて家に入った

だけど家には・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「久々あの日のゆめを見ましたね。
それにしてももうあの日から１０年たったんですか
はぁ～いまだに借金は全ては返済できていませんね。
まあたぶん今月か来月中には
返済できるでしょう。」

「全くあのだめ親にも困ったものですね」
少し悲しそうに言った。
「５歳児に何を求めていたんでしょう。
１億円なんて大金をどうやって返済しろと・・・。
何とか返済することできそうですが普通なら

死んでしまいそうなものですが。

というか私は何でこんな独り言を言っているのでしょう。
いつもなら何も言わずこの間にも内職でもしているのですが・・・・
まぁいいでしょうバイトにでも行きますか。」

そういって彼女は今にも壊れそうなぐらいボロいアパートから出る
つもりだったが
ドアを開けたらウサ耳をつけた人が倒れていた。

「エ？？？？？・・・・・・・
って大丈夫ですか！！！！？
意識はありますかしっかりしてくだ（グーーーー）

ウサ耳をつけた人「お・・・・おな・・か減った」

「エ？」

第一話（後書き）

今まで読むの専門だったんですが
初めて書いてみました
というかかけない！！！
ほかの人はどうやって
あんなに面白くて長文なものをかけるんだ～～～～！
何でもいいのでアドバイスをください・・・・
（１２月１１日）少し直しました。

第二話（前書き）

２話目です
１話を少し直しました＋内容追加。

第二話

あの後私は倒れていた人を家に入れてバイトを休むために連絡を入れている

「すみません・・・」
「あやまられたって人手が増えるわけじゃないんだから！
全くなんでこんなに急に休むって連絡を入れるわけ？！」
「すみません・・・・」
「だぁぁぁもういいわよ！
かわりにシフトに入っている来週まではきちんと
バイトに来てもらうわよ。もし休んだら
今度こそ首よ！！」
「ありがとうございます！！」
「じゃあきるわよ」
「はい！本当にありがとうございます！」

電話を切って
「ふぅこれで三件目ですね。
はぁ四件目のバイトは・・・・
休むっていたら首になっちゃうかも知れませんね。
え～と番号は、」

「すみません、今日は少し体調が優れなくて、
バイトを休んでもよろしいでしょうか？」
「明日店に来い今日までの給料を渡す。」
「それってクビですか・・・」
「そうだ。」
「すみませんでした。」

「じゃあきるぞ。」
「はい・・・」

はぁやっぱりクビになっちゃいましたね。
まぁしょうがないでしょう。
あの人のために何か食べるものでも作りますか。

後ろを振り向いて
「すみません。
何かアレルギーとかありますか？
って何勝手にパンを食べているんですか」
ウサ耳の人「あなたには関係ないでしょ」
「いやありますから、それ私の一週間分の食料ですから
ウサ耳の人「はぁ？この食パン１５枚が？」
「ええ。そうですよ。
はぁ・・・もういいえでよ好きに食べてください。
そういえばあなたがもっていたバッグなんですが
返しときますね」
ウサ耳の人「あ・・・ありがとう」
「いえ、べつにいいですよ。篠ノ之　束さん」
束「・・・・・私のこと知っているんだ。
で何が目的？」
「？？目的」
束「私のことを助けたってことはＩＳでもほしい」

は・・・いったい何を言ってるんですか？この人は・・・
単純に人が倒れていたから助ようとしただけなのですが
何勝手に目的とか言われなきゃいけないんでしょうか？

「そんな見返りがほしくって助けたんじゃありません！！！
単純に人が倒れていたから助けようとしただけです何かご迷惑でしたか！？」

言い終わった後に私は
篠ノ之　束さんをにらもうとしましたが
妙にキョトンとした顔でわたしをみてきます。
どうしたのでしょう。

束「ごめんなさい・・・
バイトまで休んで私にかまおうとしていたから・・・」

まさかあやまれるとは思っていませんでした
ほとんどの人には無関心ときいていましたし・・
「いいえ別にいいですよ。
そういえばまだ自己紹介していませんでしたね
はじめまして私の名前は　小山　雪　です」

第二話（後書き）

束さん別人にしか見えない・・・
すみません
興味関心を持っていない人に対しての束さん
がどんな口調かがわからなくて・・・

第三話（前書き）

消えた・・・せっかく連続投稿使用と思ったのに・・・

今回はキングクリムゾンが入ります

すみません

第三話

こんにちは雪です
いったいなにが起きたのでしょう・・・・？
いえ、ちがいますね何でこうなったのでしょう・・・・。

たしか一週間前
束さんに自己紹介をした後
いきなりゆーちゃんとよばれたり、
束さんが転んでバッグを落としたひょうしにバッグに入っていた紙
がばら撒かれたり、
紙を拾い終わったら束さんが
ばら撒かれた紙のうちの一枚を出して
これわかるかと聞いてきたり
意地になってしまい１０分待ってくださいと言って
平行思考をフルに使って何とか理解できた内容を束さんに答えたら
束さんはとても喜んで、これはわかる、じゃあこれはと言ってきたり
帰る前に束ねさんが「来週はバイトを入れないでね。ゆーちゃん」
といわれ
反論を言う前に束さんが帰ってしまったり色々とありましたが
なんで束さんはＩｓをつかっているのでしょう
なんで私は束さんに抱えられているのでしょうか？
そしてここはどこなんでしょうか？
はぁ・・・現実逃避をやめて直接束さんに聞きますか

雪「え～と束さん私は何で連れ去られたんでしょうか？そしていったいここはどこでしょうか？」
束「連れ去られたなんてひどいなぁぶぅ～ぶぅ～」
殴ってもいいでしょうか？
束「わ・・わかったよぅ
話すからこぶしをふりあげないで～」
あれいつの間にこぶしを振り上げていたんでしょうか
まぁ殴ってもいい気がしますけどねいきなり人の
予定も聞かずに連れさる人なんて。」
束「ごめんなさい！
だからなぐならないで～～」
雪「あれ声が出てましたか？
まぁいいですがそれで私はなんでここにつれてこられたんですか？」
束「それはね何と、何と私のＩＳ作る助手をしてもらうためだよ～」
雪「え・・・・・・・・・・
ＩＳ作るための助手！！！！！！！
何をいっているんですか私はただの一般人ですよ何で私なんですか
というかここって束さんの研究所ですよね。
こんなに簡単に誰かに研究所の場所を教えないでください！！
私がここの研究所の場所を誰か教えるとか思わないんですか！？」
束「うんうんやっぱりゆーちゃんはいい人だね～～
私の心配をして私のことを怒ってくれるなんて。」
雪「何を言っているんですか？
私はいい人じゃないですし
あなたのために怒ってなんかいませんよ」
束「簡単に研究所の場所を教えるなって起こってくれたたのはだれっだけな～～」
雪「・・・・そ・・それよりもなんで私なんですか」

束「ずいぶん急に話を変えたね～って話すから話すからこぶしを振り上げないで
え～とゆーちゃんなのはねゆーちゃんが天才だからだよ～～」
雪「私は天才なんかじゃないですよ。
単純に平行思考ができるだけです」
束「なるほど～平行思考か～だからゆーちゃんは
頭の回転が速いんだね（平行思考なんてできる人は天才だと思うんだけどな～）
いったいいくつくらいできるの？
あれを１０分以内で理解するなんて１つじゃないと思うし
ちなみに私は４９個までできるよ～～」
雪「２１個ですよ束さん比べるとかなり少ないですが・・・」
束「２１個かぁ
さすがに束さんも予想外だなぁ」
雪「ご期待にこたえられないようですみません。」
束「ち・違うよ～
想像以上に多いってことだよ
（２１個で期待にこたえられないって束さんはどれだけ高望みしているとおもっているのかな）」
雪「え？でも束さんよりもずいぶんと少ないと思いますが？」
束「それは束さんはもう何年もＩＳを研究しているからね～
平行思考の５０個６０個できなきゃやっていられないよ～」
雪「そ・・そうですか
（なんか納得できてしまいますね）
だけそ私より優れた人なんてもっとほかにもいるでしょう。第一思考の１つ１つの質があなたと比べてもかなり低いですし。」
束「ゆーちゃん位優れた人なんてあんまりいないよ～
それに束さんよりもすごかったら助手じゃなくて
ＩＳについての談義でもしているよ
（普通の人よりも質もかなりいいんだけどな～

もし悪いんだったら各国の研究者の人たちが何１００人集まってもわからないことを理解なんてできないんだけどな～）
それにゆーちゃんが助手になってほしい一番の理由は私が気に入ったからだよ！」
雪「はぁ・・・しょうがないでね。
（気に入ったなんていわれてしまったらむげに断ることもできませんし）」
雪「ですがバイトはかなり悩みましたがあなたに言われたとおり今週はいれていません。けど借金返済のためには来週から入れたいのですがじゃないと毎月利子がかさんで大変なことになるんです。あなたが言っている助手の期間は一週間じゃないでしょうし第一Ｉｓの理解もまだできていない状態ですし。」
束「借金のことは束さんに任せなさい　ブイブイ
それに私がゆーちゃんに教えればＩＳのことはすぐにりかいできるよ～」
雪「そんなピースされても・・・」
束「大丈夫、大丈夫
束さんが借金を代わりに返済したあげるから任せなさい」
雪「駄目です！借金は私が返します。
もう少しで借金全額返せますし。
ここまできたら意地でも自分で返します。」
束「ぇーーーで「でももへチマもありません！！」
まだ言い終わっていないのに～
じゃ～束さんがバイト代として利子の分だけでもお金を払うよ～」
雪「あまりそれでいいとはいいたくないんですが・・・それ以上はあなたも引いてくれそうにありませんし
しょうがないのでそれでいいとします。」
束「そうだもう一つ言言い忘れたことがあったんだよ～
再来月にＩＳ学園に編入してくれない～？」
　　ゴンッ

束「痛いな～たばさんの天才的頭脳が馬鹿になったらどうするの～」
雪「いえいえ　脳は刺激を与えると新しいことをひらめくんじゃないかな～と
思いまして。じゃなくて！何でそんなに急なんですか！」
束「なるほど～あ！！おかげで新しいことがひらめいたよ～
ちょっと待ってて今から少し考えをまとめてくるから～」
雪「え、本当にひらめいたんですか
ってちょっと待ってください
ってもういませんし。どれだけ天真爛漫なんですか
はぁ」
小さくため息をついた

第三話（後書き）

疲れました・・・
束さんとの会話は変です
口調が本当に全くわからない・・・
誰か助けてーーー

次回もキングクリムゾン　小山　雪　のＩＳ学園受験まで
次回束さん以外の原作きゃらと遭遇

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2783z/

IS　貧乏人と織斑一夏

2011年12月11日07時49分発行